



ダイバージョナルセラピー 実践発表全国大会 2017<大阪>



2017年12月3日(日)

主催

NPO 法人 日本ダイバージョナルセラピー協会

会場

大阪リバーサイドホテル

ダイバーショナルセラピー実践発表全国大会 2017<大阪>

☆プログラム☆

- 10:00 開会の挨拶 田附潤一理事・事務局長
DTW先輩として 吉川昇平理事
- 10:20 DTの概要と最新情報 芹澤隆子理事長
- 12:00 ランチタイム
- <実践発表>
- 13:00 割烹着は元気の素 高屋利啓（北海道）
- 13:15 畑を通したDT活動 村上菜津美（大阪）
- 13:30 認知症ケアにおけるドールセラピーの活用 柴田康弘（兵庫）
- 13:45 通所リハビリテーションと介護老人保健施設入所でのDTの取組み 江口慎吾（熊本）
- 14:00 休憩
- 14:15 上を向いて歩こう 今江麻由美、金子明日香、松尾美由紀（埼玉）
- 14:30 重度要介護高齢者に対するスリープマネジメントの効果検証 岡裕一郎（香川）
- 14:45 エプロン de 相乗効果 南保菜々実（北海道）
- 15:00 最後の生活の場に“楽しい”を！ 石井俊幸、松本典子（群馬）
- 15:00 休憩
- 15:15 「Men'sクラブ Luna ☺ Felice」を実践して 柿原 恵（熊本）
- 15:30 認知症治療病棟におけるDT活動と作業療法士の役割 長野 綾、森藤拓也（香川）
- 15:45 “はなればっち”じゃないよ 重安真由美（山口）
- 16:00 朝のびっくり大作戦&DTW出張 道下悦子（北海道）
- 16:15 質疑応答とフリーディスカッション
- 16:45 各賞の発表～表彰～
- 17:30 終了

※文中では、入居者、利用者、家族等の敬称を略させていただきました。



割烹着は元気の素 ～割烹着は主婦のアイテム～

高屋利啓
介護福祉士

有限会社おいらーく デイサービスセンター夢のみずうみ村生きがいサロン 銭函

【背景・目的】

生きがいサロン銭函には、施設に入居されているAさん（94歳女性）が通っている。Aさんは昔、ラーメン屋を経営していた。店が大学の近くあったことから学生を中心に大繁盛していたということを、デイサービスに来られた時には、職員や、他利用者に嬉しそうに話している。当時の動画も残っており、割烹着を着てとてもイキイキと働き、お客さんと楽しそうにしている姿が映っている。しかしその時以外は消極的で、レクリエーション活動にも自ら参加することが少なく、職員や他の利用者からの誘いによって参加することが多く見られている。デイサービスでも昔のようなイキイキとした姿を見ることが出来ないかと考えアプローチしたので報告する。

【方法・DTポイント】

行事として行っていた職員と利用者が一緒に料理を作る「昼食作り」という活動を、毎日の活動プログラムに加え参加していただいた。チョイスの要素として、調理の前に数着用意したエプロンや割烹着の中から自分の好きな物を選ぶ。その日の昼食メニューを伝え、材料の切り方や味付けをご本人と相談しながら調理する。盛り付け、配膳、下膳、後片付けまで行う。

【結果】

こちらから声掛けをしなくても自ら「昼食作り」を毎日のプログラムとして選択するようになった。調理の時間になると割烹着を着て準備を始めるようになった。その他の活動にも積極的に参加するようになった。

【考察】

ラーメン屋を営み、お客さんに美味しいラーメンを提供していたことがご本人の自慢であり、やりがいであった。その背景から、デイサービスの昼食作りが自分の役割と結びついたと考えられる。また、割烹着を着て昼食を作ったことで“プロ意識”が刺激され、「自分はまだまだやれる」と思うことができた。その気持ちが積極的な活動の参加に繋がっていったと考えられる。

【倫理的配慮に関する事項】

本発表を行うにあたり、ご本人（ご家族）に口頭にて確認をし、本発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し、回答をもって同意を得たこととした。

畑を通したD T活動 ～取り組みから見出せる喜び、やりがい～

村上菜津美

第12期D T W / 介護福祉士
社会福祉法人清松福祉会 総合老人福祉施設夢心

【はじめに】

「夢心」は畑を中心に取り巻く環境として、地域のボランティアの方々、園芸専従のスタッフ、地域（園児との世代間）交流、収穫作業、日曜喫茶（一般開放）などがある。その中でD Tとして実践している取り組みの一つを紹介したい。その活動が不安症であった入居者O氏の喜びや、やり甲斐につながり、また、スタッフやボランティアの方々のやり甲斐にも繋がった。

【取り組みの実際】

①畑を支えてくださっているのが、地域の園芸ボランティアの方々。畑をツールに定年を迎えても活躍できる場所、人と関わる場所として存在しています。やりがいを感じられるよう、利用者との関わりを持ちながらリアルタイムに喜んでいる姿を見ていただけること、自分達が手を掛けた野菜を日曜喫茶や職員食堂で使用され、いろいろな人に味わっていただけることなどがやりがいに繋がっている。

②園芸専従のスタッフは園芸のD Tとしての役割も発揮。利用者の方と関わるレクリエーションでも活躍する。畑での作業が減る冬の間の「冬のプロジェクト」を発案するなど、自分たちが考えた企画を利用者が喜んでいる姿を見て、スタッフもやりがいを感じている。

③収穫の喜びを味わうことを大切に、野菜だけでなく、今回は「鶏のプロジェクト」を実施。回想法の効果を発揮したり、卵を収穫・調理する一連の流れが、喜びをそのまま感じられる環境になっている。その中の一事例としてO氏の例を取り上げご紹介。

【事例紹介】

対象者：O氏、女性、83歳

介護度：要介護3、認知症あり。物忘れが強い。少し前のこともすぐ忘れてしまう。

歩行や動作は問題なし。

性格：温厚、寂しがり屋、誰かと一緒に過ごすことが好き、不安症。

「夢心」入所日：2016年7月13日

【まとめ】

さまざまな方が畑を通じて関わる事で、今回O氏の環境に変化が生まれた。収穫し調理する“自裁自消”の一連の流れで、喜びをそのまま味わうことがいつしかO氏の自信へと繋がり、不安症であったO氏が前向きになった。今回の事例は、園芸ボランティアの方々の支えや、園芸専従スタッフ、冬のプロジェクト、収穫できることなどさまざまな関わりや努力の中で生まれた成果だと考える。そしてまた、O氏の喜ぶ姿を見ることで、ボランティアの方や園芸スタッフの意欲の向上ともなり、やりがいを感じられること、お互いの意欲が高まること、これが畑を通じたD T活動だと思う。

認知症ケアにおけるドールセラピーの活用 「泣き笑いたあたん」を用いて利用者と介護者の変化を見る

柴田康弘

福祉用具専門相談員

フランスベッド株式会社メディカル神戸営業所

【背景】

弊社のメディカル営業部門では、34年前に福祉用具の販売とレンタルの事業を立ち上げたが、当時の介護用品は、どちらかというところ「できなくなった部分を補う」「お世話をする」という機能的でマイナスのイメージが強かった。2001年、可愛い赤ちゃん人形「たあたん」が登場し、初めてドールセラピーを知った。以来、弊社では福祉用具としてこのような考え方に共感し、その販売に力を入れると同時にドールセラピーのベースでもあるダイバーショナルセラピーの普及にも協力することとなった。福祉用具専門相談員としても介護現場が随分変わったという印象を強く感じた。当社では2016年から、「たあたん」の開発者芹澤隆子氏の協力を得て、従来の「たあたん」の赤ちゃんの抱き心地といった「感触」や、想像力を刺激する顔の表情などの「視覚」への効果に加えて、センサーを組み込むことで泣き声や笑い声による「聴覚」への働きかけを付加することでより想像力を刺激し、周囲の人とのコミュニケーションも増すことが期待されるロボット機能を搭載した赤ちゃん人形の開発に取り組み、2017年5月に「泣き笑いたあたん」を発売することとなった。この度、神戸市内の住宅型有料老人ホームと介護付き有料老人ホームの2か所の協力により「泣き笑いたあたん」が介護の現場で実際にどのような成果をもたらしているのかを観察、検証した。

【実施方法】

それぞれの施設で、認知症を伴って日常生活に困難のある入居者計4人を対象として「泣き笑いたあたん」を提供し、「表情」「言葉」「行動」などを記録する。記録方法としては、当社の山内閑子が作成した「表情スケール」等を用いる。利用者の表情や感情の変化に加えて、周辺症状の変化についてヒアリングを行った。

【結果】

対象者のうち3人は要介護3で、誤食、徘徊、放尿、不安症状などがあり、転倒リスクも高く、介護者から「見守りに限界を感じる」などの意見もあった。もう1人は、認知症は軽度であるが要介護3。他の入居者が「たあたん」を可愛がっているのを見て自分から「欲しい」と申し出て利用者となった。

「泣き笑いたあたん」の使用により、全ての利用者に気分が落ち着き、明るい表情で穏やかになる等の成果が見られた。特に「泣き笑い」の音声があることで利用者がより顕著な「感情」を抱く様子が見られた。泣き声に反応し「どうしたの?」「泣かないで」と話しかけたり、笑い声には「ご機嫌だね〜」という言葉とともに、ほっとしたように家族や職員、他の入居者の方などと顔を見合わせ、他者と気持ちを通わせようとするコミュニケーションが見られた。その他、「赤ちゃんの世話をすることで日中の傾眠が軽減され、夜間にしっかり眠られるようになった」との介護者の声もあった。一方、介護職員や周囲の方も利用者と「泣き笑いたあたん」を介したコミュニケーションの後では気分がより明るい方に変化し、精神的負担を軽減できる可能性がある事が分かった。このように「泣き笑いたあたん」は利用者を笑顔にし、会話のきっかけになり会話を増やすきっかけになり、赤ちゃんに対する感情を共有することで、利用者と介護者の円滑で豊かなコミュニケーションを促進するツールとなり得ることが確認できた。

【まとめ】

「たあたん」、「泣き笑いたあたん」を施設に薦める中で、従来の「介護用品」では得られなかった喜びを感じることができ、福祉用具専門相談員としてもダイバーショナルセラピーに貢献していけるのではないかと考えた。ただ一部には「たあたん」にあまり反応しない利用者もあり、事前のアセスメントや観察の重要性をどう理解していただくかが今後の課題である。

【参考文献】『施設ケアの新発想・オーストラリアのプロメソッド ダイバーショナルセラピー』
芹澤隆子著、三輪書店

通所リハビリテーションと介護老人保健施設入所でのDTの取組み 「ライフスタイルにスポットをあてた敬老会」と「DTの要素を入れたレクリエーションの実践」

江口慎悟

第6期DTW／介護福祉士
医療法人社団仁誠会 介護老人保健施設ケアセンター赤とんぼ入所科

【はじめに】

この発表では、赤とんぼ黒髪通所リハビリテーション(以下、黒髪通所と略す)と介護老人保健施設赤とんぼ入所科 3階(以下、赤とんぼ入所と略す)におけるDTの実践から最近のプログラムや取組みを報告する。

【目的】

- 黒髪通所：敬老会という例年のイベントの中で、今年は一人の女性利用者のライフスタイルにスポットを当てて長寿をお祝いする。
- 赤とんぼ入所：2017年8月より定期的にDTの要素を取り入れたレクリエーションを実践することによって入所者の活性につなげる。

【方法と事例内容】

- 黒髪通所：黒髪通所の最高年齢100才のAさんにライフスタイルのアセスメントを再実施し、100年の個人史を作成。職員手作りのドレスを着ていただいた。
- 赤とんぼ入所：DTのベースプログラムを取り入れたレクリエーションをDTワーカーが月に1回実施。

【結果】

- 黒髪通所：個人のライフスタイルに焦点をあてたことにより、本人の「ドレスを着たい」という思いに気づくことができ、それを実現できた。個人史の巻物も今までの人生を、家族、友人やスタッフと振り返り、共有できるきっかけを与えてくれた。
- 赤とんぼ入所：日々のレクリエーションの中にDTで学んだベースプログラムをベースにストーリーをレクの中に取り入れることで、五感の刺激になった。また目線を合わせたり円になって実施することで、集団の中でも個人個人と関わる時間がとれた。

【考察】

- 黒髪通所：通所全体やグループで行う企画や行事でも、個人のライフスタイルにスポットをあてることで企画内容が変化し、より利用者目線での楽しみの内容になる。
 - 赤とんぼ入所：レクリエーションの方法を工夫することで、集団ではあるが、より一人ひとりと関われる。
- また、ボディパーカッションでは、慣れ親しんだ曲の選曲が大切。重介護者のレクリエーションは、小グループでセッションを行うと、残存機能を活かそうとする意志や姿勢が垣間見ることができた。

【まとめ】

- 黒髪通所：日々の利用者さんとの関わりの中で知る『その人』について、情報として記録に残し、共有することで、企画や行事がより利用者さんの目的に応じたプログラムとして計画することができる。
- 赤とんぼ入所：レクリエーションにDTの要素を取り入れるだけで、集団の中でも個々にアプローチする機会が増える。また、五感を意識することで、内容にも変化が生まれる。

上を向いて歩こう

松尾美由紀 今江麻由美 金子明日香
第10期DTW／介護職員
社会福祉法人えがりて 特別養護老人ホーム吹上苑

【事例背景】

Mさん、女性、当時82歳。埼玉県行田市生まれ。20歳ころ浦和に転居し、結婚。夫は教師、本人は平成9年まで看護師として病院で働いていた。趣味を活かしコーラス隊に入り、何より歌うことが好きだった。子どもは2人(男性)各々、家庭を持ち埼玉県内・神奈川県に在住。夫婦2人で暮らしていたがアルツハイマー型認知症のため、BPSDが出現しユニット型特養吹上苑へ平成23年に入所した。

苑内を散歩することが日課で「千の風になって」を歌うのが習慣となっている。浦和に住んでいる夫が週に1回、好物のヤクルト・十万石饅頭を必ず持参し、面会に訪れていた。Mさんは誰に対しても笑顔で、好奇心旺盛。穏やかで明るい性格。車いす生活に入り、次第に言葉が出てこなくなる。「あー」と言い、職員と一緒に歌うこともあった。平成28年の春ごろから、痰がらみのせき込み・むせ込みが多くなり、1日に1～2回の痰吸引をするようになった。また、次第に食事・水分摂取ができなくなり、看取り時期が近づいてきたため、ルームビジットを行う。

【目的】

看取り時期に入り、臥床時間が長くなり、言葉も発せなくなり、笑顔も次第に減ってきている。DTWとして季節の曲・童謡・なじみの曲を歌い、歌を通してMさんと心の交流を深める。楽器を使い、五感に良い刺激を与える。約20分の活動(ご本人の体調に合わせ、臨機応変に対応する)。

【方法】

挨拶をし、楽器の演奏に合わせて「ふるさと」を歌う。季節に合わせた話をしながら「小さい秋見つけた」「赤とんぼ」「七つの子」「千の風になって」を一緒に歌う。入浴剤を使い、手浴をする。短縮の場合：挨拶をし、好きな曲「かあさんの歌」「千の風になって」などを歌って聞いていただく。芳香拡散器を使用し、香りを楽しむ。

【成果】

活動前Mさんは傾眠状態に入り、うとうとしていた。夫と姉が面会しているが、事情を説明し、承諾を得て活動を行う(短縮バージョン)。職員の声掛けに薄く目を開け、鍵盤ハーモニカで「かあさんの歌」を演奏すると、楽器に合わせて「あー」という声が出始めた。曲を終えた時、目はしっかり開き、涙目に。「千の風になって」では、夫が「これは、よく歌っていたよな」と言い歌い始めると、その声に合わせてMさんも声を出す。最後に「ふるさと」「上を向いて歩こう」を演奏して終了。本人・家族・その場にいた職員が活動を終えるまで涙を流していた。活動を終わると、家族からお礼の言葉をいただき、夫はMさんとの思い出話をした。

【ここがDT】

家族と一緒に活動し、好きな歌でMさんの思い出に浸る“きっかけ”ができ、Mさんと心の交流を深めることができた。また、楽器の演奏が他の入居者にも聞こえ、五感に良い刺激を与えることができた。

重度要介護高齢者に対するスリープマネジメントの効果検証

岡裕一郎

第6期DTW/理学療法士

社会福祉法人津田福社会 介護老人保健施設さわやか荘

【背景】

高齢者の3人に一人は睡眠障害と言われており、当法人も夜間不眠や日中の覚醒度の低い利用者が多い。また重度要介護者の睡眠障害で生じる各種問題が周囲に理解されにくい傾向があった。

【目的】

重度要介護者に対するスリープマネジメントの効果を確認するため、評価スケールを作成し実施前後の評価を行った。

【実施方法】

- ①法人内でスリープマネジメントの勉強会を実施。
- ②効果判定として、日中の覚醒度と夜間の睡眠度を5段階評価するオリジナルのフェイススケールを作成。
- ③入所・通所の利用者のうち、睡眠障害があると思われる重度要介護者（要介護4、5相当）4名を対象に、平成26年2月1日～28日の期間で「朝の日光浴」「昼寝」「夕方」の運動を中心としたスリープマネジメントを毎日実施。
- ④1ヵ月後に結果報告会を開催。

【結果】

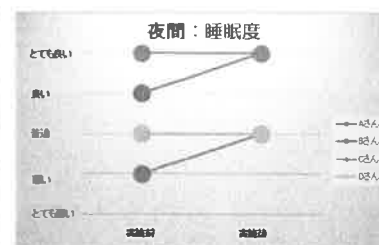
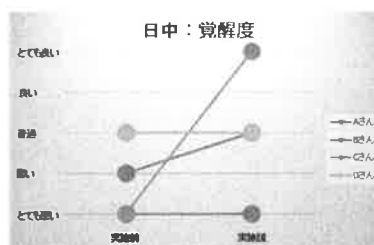
4事例中3事例の日中の覚醒及び夜間の睡眠が改善した。悪化した事例は無かった。日中の覚醒度の向上に伴い、活動性が向上し心身機能や生活機能が改善するケースがみられた。

【ここがDT！】

日中の覚醒度が低い重度要介護者は活動性や意欲が低下し、離床や運動が実施困難な場合がある。本人の興味心に合わせた活動やレクなどを実践することで意欲が向上し起床後の日光浴や夕方の運動が可能となる事例があった。

【まとめ】

今回の検証により重度要介護者でもスリープマネジメントで日中の覚醒や夜間の睡眠状態が改善し生活面に変化が生じることが分かった。意欲低下がある場合でも、本人に興味関心のある活動を取り入れることで日中の覚醒時間を長くしたり運動量が増加することがあった。しかし重度要介護者のように介護負担が大きい利用者や認知症などにより易怒性のある利用者の場合は実施困難なときがあり今後の課題と言える。



エプロン de 相乗効果 ～感情を揺さぶる仕掛け作り～

南保菜々実
介護福祉士

有限会社おいらーく デイサービスセンター夢のみずうみ村てんやわんや本町

【背景・目的】

T氏（90歳女性）2013年5月より利用を開始される。当初はパン教室等の活動に積極的に参加していたが、現在は一人で読書して過ごすことが多くなり、自分から「何かをしたい」ということが少なくなっている。活動は職員が提案しても渋々といった印象で、得意な手芸でもすぐに目的を見失い、何を作っているのかを忘れ、違う物が完成することも度々見られた。また「お願いされたから作っている」という意識から、楽しさや完成した時の嬉しさをあまり感じられていない様子である。このような状況からこの度、楽しさや嬉しさを感じてもらえるような個別アプローチを行ったので報告する。

【方法・DTポイント】

本人の特技でもある手芸を選択。「パン教室に参加する子供達のためにエプロンを作ってほしい」と目的を明確にして製作を依頼。本人と一緒に作業工程を確認しながら工期も含めた手順書を作成。手順書を見ながら完成させ、本人が子供達にエプロンを手渡す。その後、そのエプロンを付けて一緒にパン教室へ参加できるよう子供達と職員で働きかける。最後にエプロン製作時の写真と子供達とパン教室に参加した時の写真をアルバムにまとめて渡す。

【結果】

作業を始めた当初は、今までと変わらず「頼まれたからやる」という意識だったが、手順書を作ったことで「子供達のために自分が作る」と前向きな意識が生まれた。製作中には、度々「この子供達が私の作ったエプロンしてくれるんだもんね」という言葉が聞かれた。エプロン作りでは、自らが手順書を確認することで職員がいなくても作業を進められ、完成することができた。エプロンを渡す当日には、子供達との交流で最近見たことのない笑顔が見られ、子供達の初めてのパン作りを主導的且つ積極的にサポートしてくれた。その後も、アルバムというアイテムの活用でパン教室の参加を続けている。

【考察】

自分が何かをするという時の動機づけや物を製作する時の手順が視覚的に確認できたことでエプロンを完成できたと考える。その後もパン教室の参加を継続できたのは、子供達とパン教室に参加した時の嬉しさや、楽しさ、可愛かったなどの感情がアルバムによって思い起こされたからと考えられる。

【倫理的配慮に関する事項】

本発表を行うにあたり、本人（家族）に口頭にて確認をし、本発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し、回答をもって同意を得たこととした。

最後の生活の場に“楽しい”を！ ～ユニット型特養におけるDTチャレンジ～

石井俊幸（第10期DTW／介護職）

松本典子（介護福祉士）

社会福祉法人グリーンハート 特別養護老人ホームタマビレッジ

【背景】

平均介護度4という現状に職員も業務に追われがちで、レクリエーションを考える余裕もなかった。そんな中でDTを知り、2014年から施設として取り組むことになった。特別養護老人ホームは利用者にとって最後の生活の場であり、そこで安心して楽しく生活してもらうためには何をしたらよいか、その答えを見つけるために実践してきたDTの活動内容を紹介する。

【実施の経緯】

- ・少しずつDTプログラムを実践しながら、講師を招いて職員へのDT研修を1年間継続。
- ・DTチーム作り、毎月1回DT委員会を開催して、その月の主なプログラムを検討する。
- ・各ユニットに「たあたん」とDTカートを設置して、日常のDTを模索
- ・DTアセスメントの見直し→SONASセッションの計画表に記入する

【実践例】

①ドールセラピーの取り組み

85歳女性。入所して間もなく、泣きながら徘徊する行動がみられ、個別DTに取り組む。アセスメントの中から、母親代わりとなって兄弟を育てた経緯がわかったので、子育てや家事などを行うことで気持ちを安定できるのではないかと考え、ドールセラピーを試みた。「たあたん」を身近に置き、赤ちゃん服の洗濯や茶わん洗いなどの家事を行なってもらった。結果は「たあたん」と接する時間が多くなり、泣きながら徘徊することが少なくなった。

②個人に焦点を当てたSONASセッション

A：新入居者の歓迎セッション

83歳男性、病院からの入居。N様は失語症もあり、人との関わりは苦手な様子。セッションの始めに職員が歓迎の気持ちを込めてN様を紹介。本人にも自己紹介していただく。DTが進むと表情が徐々に和らぎ笑顔がみられるようになった。最後には自分から大きな声で得意の歌を独唱し面会のご家族は涙された。病院では否定的な言葉しかなかったという。

B：心に残る誕生日会

90歳男性。誕生日の一月前に体調を崩してADLが低下し、気持ちも落ち込んだため、何か気持ちの晴れるようなプログラムはないかと考えた。挨拶をするといつも敬礼される元自衛官のM様。そこでM様の誕生日には自衛官時代の制服を着て若き頃のパワーをもう一度感じていただきたいと思った。制服姿をバッチリと決め、お祝いを言う入居者や職員一人一人に笑顔で丁寧に敬礼を返されるそのお姿からは、落ち込まれていたM様は消えていた。

【これからの取り組み】

まだまだレクリエーションの時間を作り出すことに苦労しているが、職員からはSONASセッションのユニークなテーマやアイデアも出るようになってきた。これからは“日常のレクリエーション”の継続が課題である。今までの経験を活かしたタマビレッジ得意のプログラムを考案し実践していきたい。

認知症治療病棟におけるDT活動と作業療法士の役割

長野 綾(第4期DTW/看護師)

森藤拓也(作業療法士)

医療法人和風会 橋本病院

【背景】

橋本病院では2008年から認知症治療病棟(以下、病棟)にダイバーショナルセラピー(以下、DT)を導入した。その後、病棟主任2名がDTWを取得する。実施するにあたり現場では作業療法士(以下、OT)が中心となり実践を重ねた。OTが介入することで独自の視点で患者に関わることができ、DT活動の枠組み作りに繋がったと考える。

【目的】

第一の目的はOTの専門性を生かしてDT活動のリズムを作ることである。OTの専門性としてリハビリ・環境調整・啓発活動が考えられるが、病棟では専門性を持って活動を行うことが少なかった。そのため今年度より病棟全体でOTの専門性を理解してもらうため積極的に活動を行うことが必要であると考えた。専門性を高めることで患者に対してもより良い生活を提供することができQOL向上につながると考える。

【実施方法】

病棟全体でOTとDT活動を理解してもらうため、①DT活動の定着、②個人介入、③人的・物的環境の調整、④他職種に対する働きかけが必要であると考えた。そのため①DT活動の定着に向けてスケジュールの決定やカレンダーの作成、②個人介入にはポジショニングやリハビリ介入を積極的に病棟全体に発信・連携、③環境調整に関しては福祉用具の充実・リハビリ道具の補充、④他職種に対する働きかけには、紙面による集団活動・ポジショニング提供を実施した。

【ここがDT】

DTの実施は、病棟全体の協力が必要でありスタッフと患者双方が統一した目的を持つ必要がある。目的としては「楽しみ」「社会性」等に視点を向け、個々のライフスタイルに合わせた活動を探ることが極めて重要である。目的に合わせて活動を行うためには患者の趣向・ライフスタイルなどを探索して活動を選択する必要があるが、全員の趣向・ライフスタイルにあった活動を実施することは難しい。そのため他職種が協力し関わりを持つことで、昔の歌や踊り等を通して一人一人の好きなこと想起、再生してもらう。その個性を発揮することがDTであると考えた。そのため10年間継続してきたSONASセッションや重症者のためにセンサリーセラピーに加えて、OTの視点による作業や運動にも力を入れてきた。

【結果・まとめ】

今年度よりOTが2名体制になった事でDT活動が行える場面・時間が増加し、活動の幅は広がったと考えられる。去年度までは1名体制でありDT活動が行える場面・時間が限られていた。しかし2名体制になることでDT活動が行える場面・時間が増加することでOTの専門性を持つ活動を以前より提供しやすくなったと考える。また他職種に積極的な活動提供を行うことでOTが本来持つ専門性が病棟全体に浸透してきている。今後は認知症治療病棟の患者の症状段階に合った活動を行っていく必要がある。段階に合わせた活動を行くために従来のリハビリテーションにDTアセスメントを生かして、積極的に介入する事が大切である。2名体制となり半年間であるが病棟全体でのOTの役割や活動内容が変化などポジティブな場面が見られているため、継続してDT活動を行うことで患者に寄り添った活動を提供していく事ができると考える。

「Men'sクラブ Luna☾Felice」を実践して

柿原 恵

第9期DTW／看護師

医療法人社団仁誠会 仁誠会クリニック黒髪

【目的】

仁誠会では2008年よりDTを導入し実践している。仁誠会には5つの透析クリニックがあり、黒髪もその一つ。10月に外来患者を対象に初めて「Men'sクラブ」を計画実施した。透析と自宅の行き来だけで生活が単調になりがちな患者に、DTプログラムとして、普段とは違う刺激のある場を体験してもらうことによって、今後のアプローチに繋げる。中でも、認知症をともなう患者への五感への働きかけによる変化に重点をおき、通院時における楽しみに繋げ、今後のDTに生かしていく。

【背景】

これまでSONASセッションやネイル、季節の飾り付けなどのDTプログラムを実施してきたが、どうしても参加者は女性が多かった。そこで、男性だけの会を実施すれば気兼ねなく楽しんでいただけるのではないかと考えた。院長から「お月見をしたら?!」という提案を受けて、テーマを「月」とした。対象は当院の男性透析患者(40～80歳代)、19名。

【実施方法】

男性患者が働き盛りの頃、よく行ったであろうバーやクラブの雰囲気を再現。ビールやカクテルなどの飲み物(ノンアルコール)やつまみ類を用意し、ジャズのBGMや当時の映画映像を流した。このような時間を共有することで患者同士の交流を図り、当時のことを思い出し、語り合ってもらおう。

【ここがDT】

認知症で記憶が続かない患者には、実施前から会うたびにMen'sクラブの話をするなど、楽しみをつないだ。当日は自己紹で一人ひとりに焦点を当て、お互いのコミュニケーションをも促した。できるだけ五感を通して“ほんもの”を感じていただくために、スタッフの服装、部屋の照明やインテリア、メニューのデザイン、グラスやカクテルの名前にもこだわった。月をイメージした飾り付けとし、店名も「ルナ・フェリーチェ」(やさしい月)とした。

【結果とまとめ】

認知症のため急に怒りだしたり、表情が強張ることのある患者も、穏やかな表情でリラックスして過ごされた。非日常的な刺激や楽しいこと、特別な体験や好きなことであれば、記憶に残りやすいことが実感できた。患者にとっても昔の活気ある時代を思い出し、よい刺激になった。具体的には、次のような状況が見られた。

- ・認知症のためコミュニケーションの取りにくい患者が、自己紹介では自ら立ち上がり、生き生きと話された。
- ・部屋へ入室される際、歩くスピードも普段と違い、颯爽と表情もきりっとされていた。
- ・いつもに増してオシャレをし、雰囲気が違った。奥様と一緒に服を選んで来られた。
- ・クレームの多い40代の患者で、このようなイベントには参加しないだろうと見られていた方が、意外にも快く承諾して、笑顔を見せながら参加した。そして、自分とは年の離れた患者の話にも耳を傾け、頷きながら聞いておられるのを見て「決めつけないで接していくこと」を学んだ。
- ・「Men'sクラブ」実施後は、会話が増え、患者の表情が柔らかくなったように感じる。今後も透析だけじゃない「黒髪」に来る楽しみや親しみが持てるように、DTワーカーとしてその手助けになりたいと思う。

“はなればつち”じゃないよ
～利用者さんの輪の中へ入ろう～

重安真由美

第12期DTW／看護師

(株)ホームケアサービス山口 デイサービスセンターのんびり村花岡

【はじめに】

私たちの「花岡デイ」は2012に開設。1日の平均利用者数は約20名。その中で週に4回デイサービスを利用されているTさんは、利用の間に大きな声が頻回に出るため、多くの利用者から苦情が寄せられていた。他の利用者に配慮するあまり、Tさんには個別にスタッフがつきっきりで好きなことを提供したり、人の輪から離れて過ごすようになっていた。すると状態は悪くなるばかりで一人孤立してしまった。そこでDTの基本に立ち返り、もう一度Tさんの想いをスタッフが感じ取り、Tさんの気持ちに寄り添った関わりをすることを考えていくことにした。そのきっかけとなったのは、Tさんの「はなればつちはいやだよ」というつぶやきに、DTWの一人が気づいたことだった。

【目的】

デイサービスの間中孤立している状態から、皆の輪の中へ入っていき、精神的に安心してきてTさんらしく過ごしていく。そして皆で楽しめるように働きかける。

【実施】

大きな声が頻回に出ることで苦情が出ないように人の輪の中から離していくのではなく、発想を転換させてあえて声が出ても皆の輪の中へ入っていき、お互いが苦手としている人との関わりを持ってもらえるようにプロセスを考え実施、進行させていく。同時にTさんが望んでいた散歩を継続、デイサービスでも実施されているスリープマネジメントに散歩を加え継続させていった。そのことでTさんに意欲が生まれ、色々な事が少しずつ前進していった。

【結果とまとめ】

TさんへのDTプログラムを継続させることは大変で、なかなかTさんの笑顔も見られず、スタッフも苦勞し諦めたくなることも度々あったが、少しでもTさんの変化や穏やかな表情を見るとやる気アップ、DTWにとってはスタッフの協力が支えになった。手さぐりでの継続だったが、上手く行かなければまた考え、方向転換していく。それが私達のDT。継続の中から、成果が生まれ、他の利用者からの協力とたくさんの「ありがとう」が生まれた。DTの関わりを通しTさんの変化をここにまとめて発表する。

朝のびっくり大作戦&DTW出張 ～ルームビジットとスタッフへのDT普及～

道下悦子

第11期DTW/介護職員

有限会社おいら一く 看護小規模多機能型居宅介護事業所えくぼ元町

【背景】

対象者は要介護5の女性Aさん。お話し好きで明るくご飯が大好きなAさんが急に元気がなくなり表情も乏しく、食事をたべなくなってしまった。病院にて受診するも原因不明。食事介助の方法や食事場所などを変えてみたが変化が見られず、体重も落ちていく一方だった。

【目的】

元気がなく口数も食欲も減って、食事も自己摂取が難しくなったAさんに、以前のように明るく食欲も取り戻してほしいと考え、五感の刺激などを取り入れたDTプログラムとして「ルームビジット」を実施することとした。実施に当たってはDTワーカー以外の職員も主体的に関わることによって、自らDTを考えるようになり、全職員へのDT普及の推進になると考えた。

【方法】

午前8時から8時15分の毎日決まった時間に職員が日替わり交代で食事介助専属としてAさんの居室に入り、何か一つ五感の刺激になることを実践して反応を観察。その様子を必ず記録に残すこととする。

【ここがDT】

「Aさんの笑顔を引き出したい」「脳を揺り動かすような刺激を与えたい」と各職員があの手この手を考え、五感の刺激を工夫して実践した。また、いつもは事業所内にDTWが一人という現状だが、今回の取り組みを通して同一事業部内で施設同士が連携。「DTW出張」と銘打って他施設のDTWも問う施設に出向き、Aさんのために手話をアレンジしたDTプログラムを行うことで、DTWの孤立感をなくし、より多くのアイデアでDTが広がった。出張先の事業所ではその様子をみてDTW以外のスタッフもDTへの興味が強くなってきた。